

## 重陽詩宴の題

はじめに

平安朝仮名文学における漢詩文の影響の少なからぬことは旧知の事実であり、一見、日本独自の文学であるかのような和歌においても、漢詩文からの表現摂取や、漢詩文を本説とする和歌の存在など、その影が色濃いことは、もはや常識という範疇のものであろう。

なかでも、和歌題詠は、漢詩のその模倣に端を発するものであり、漢詩文がなければ存在しないと言っても過言ではない詠作形態である。また、和歌題詠の行われていた平安の貴族社会が律令社会であることを鑑みれば、漢詩の題詠について全く触れずに和歌の題詠をみていくことは不自然であり、歌題をみる場合にも、詩題を無視することはできない。

今回、重陽詩宴での題を採り上げたが、本稿は、これを通して平安期の詩題の特徴を見ようという試みであり、さらに、そこから得たものを、今後、平安期の歌題を考察する上での前提

にできればと考えている。

重陽節会は九月九日の重陽節に行われる宮中の年中行事の一つである。<sup>注1</sup> 九月九日を重陽節とすることは中国に始まるものであり、「重九」の音が「長久」に通じるのでこの日を吉日とした、というのがそもその原義であるという。<sup>注2</sup> また、宴席を設け、茱萸を身につけ、菊酒を飲む、という習俗は漢代に始まったものと伝わる。<sup>注3</sup>

日本における重陽節会は、天武天皇十四（六八五）年の『日本書紀』の記録が最古のものであるが、天武天皇が翌年の九月九日に没しているため、その後停止されていた。再開するのは、平安期に入ってから、弘仁三（八一二）年嵯峨朝でのことである。<sup>注4</sup> しかし、延長八（九三〇）年九月二十九日の醍醐天皇の崩御により再び停止されることとなり、天曆四（九五〇）年からは、代替として十月に残菊宴が行われていたが、重陽節会は安和元（九六八）年再度復活する。

しかし、復活した重陽節会は、平座であったり、日記記録類

三 原 ま き は

からその記述が減少したり、といったように、従来ほど公的行事として重要視されなくなりました。また、平安末期には作文も行われなくなっていたらしく、重陽節会が文芸の場として機能しなくなりつつあったことも知られている。<sup>注6</sup>

そこで今回は、この一様でない重陽節会の変遷を加味しつつ、重陽詩宴において出題された題と作文を中心にみていくことで、王朝漢詩全体の題と題詠について考察していきたい。

重陽詩宴にて出題された題を年代順に示したものを、本稿末に付した（「重陽詩宴の題一覧」）。

この表より、重陽詩宴で出題された詩題の特徴と傾向をいくつか示せば、まず、九世紀における出題の記録が多く残り、時代が下るにしたがって少なくなっていることがあげられる。これは、述べたように、重陽節会開催そのものの減少に依拠するものであろう。

また、十世紀に入ると句題<sup>注7</sup>が多くなってくる。九世紀には4割ほどであった句題が、十世紀になると6割近くまで増え、十一世紀以降はほとんどの題が句題となる。

そして、句題の中でも、宇多朝頃から五字の題が増え始め、一条朝以降は、全ての句題が五字になる、という句題の字数の固定化も認められる。

さらに、題の内容をみると、重陽節とは関係のない秋の題から、九月九日という日付や節会そのものに関する題が多くなり、次第に菊に関する題へと変わっている。

以上の点をまとめれば、重陽節会の詩宴で出題された題は、無題から句題へ、そして不定字数の題から五字題へ、さらにには題の内容や質の変化が認められるという流れがあるといえよう。

以下、これら三点について、実際の詩題と詠作を踏まえながら具体的にみていくこととする。

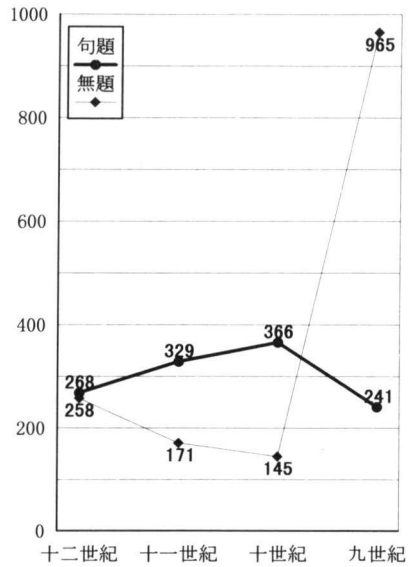
## 一 無題から句題へ

「はじめに」で示したように、重陽詩宴において、九世紀に6割近く出題されていた無題は、十世紀になると4割強にまで減少する。そして、十一世紀以降はほとんど出題されず、句題にとって代わられる。具体的には、それまでは散見する程度であった句題が、宇多・醍醐両朝から突然多くなっている。（「重陽詩宴の題一覧」参照）こうした現象は、重陽詩宴の題のみ見られる現象なのであろうか。

次の【グラフ1 詩題出題数】は、平安期における無題と句題の出題数を示したものであるが、これによれば、九世紀には無題詩が圧倒的に多かったが、十世紀にはそれが逆転し、句題詩が中心となることがわかる。

また、【グラフ2 平安期詩会の題】は、平安期の詩会で出題されたと明示されている題を、句題と無題とに分けて示したものであるが、このグラフからも、宇多朝以前は無題が圧倒的に多く出題されていたことがわかる。

詩題数(題)



【グラフ1 詩題出題数】

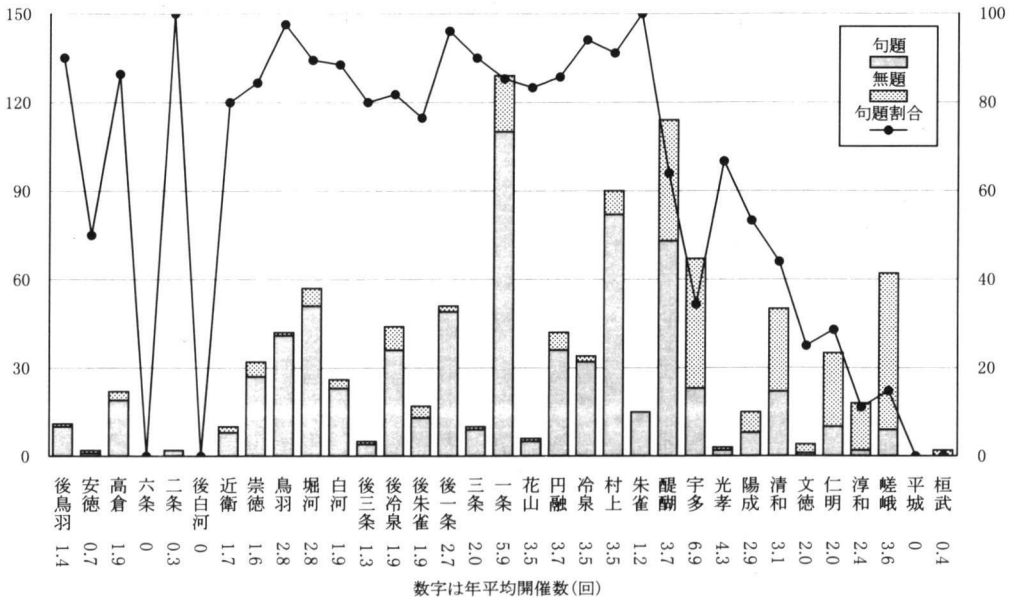
また、『作文大牀』「出題事」項に「我朝又貞観以往多以如レ此。而中古以来好「句題。」とあるように、句題は貞観以降多く出題されるようになるが、【グラフ2】によれば、貞観期の出題の実態は無題詩中心であったこともわかる。句題詩が無題詩より多くなり、作文の中心となるのは、醍醐朝の頃からなのである。

さらに、同グラフの句題の出題率からは、九世紀の間に句題の割合が増加していく様子がうかがえるし、さらには、醍醐朝以降、詩会での出題は句題が常に半数を超えるようになり、朱雀以降のほとんどの詩会で句題詩が詠まれていたこともわかるであらう。

このことから、句題の本当の流行は醍醐朝以降のものである、ということがいえるのであり、したがって、醍醐朝以降に

句題の出題率(%)

出題数(題)



【グラフ2 平安期詩会の題】

句題が激増し、その後ずっと句題中心となる、という重陽詩宴における出題傾向は、平安期の大きな設題意識の流れにおおよそ添っている、といえそうである。

そして、句題と無題の推移という点に着目した際、忘れてはならないのが十一世紀に始まる無題の流行である。

これは、佐藤道生氏が「詩体と思想―平安後期の展開」（岩波講座日本文学史3『11・12世紀の文学』平成8）で述べておられるように、「卑俗な事物を題詠の対象としようとする動き」の一つであり、野趣に富む郊外に出て作文することが一つの契機となつて定着したものである。そしてまた、雅的なものを詠む句題詩の隆盛の裏側にある現象、といつてもよい。

しかし、一条朝以降再び増え始める無題は、『グラフ1』でみたような九世紀に隆盛を極めた無題と同じものではない。重陽詩宴においても、九世紀には無題が多く出題されていたにも関わらず、再び流行しはじめた十一世紀以降にはほとんど出題されていない。（『重陽詩宴の題一覧』参照）また、詩会全体をみても、日記記録類に残るような公的要素の強い詩会では、無題は流行に関係なくほとんど出題されない結果となっている。

（『グラフ2』参照）

さらに、九世紀の無題詩と十一世紀の無題詩とは、詩の内容も趣を異にしている場合が多い。次にあげる詩二編は、島田忠臣と輔仁親王の同題による無題詩である。

遊二山寺一

島田忠臣

遊蕩不<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>世事侵<sub>一</sub>

起<sub>二</sub>於昔面<sub>一</sub>倚<sub>二</sub>松蔭<sub>一</sub>

無人独遇<sub>二</sub>真僧<sub>一</sub>語

忽有<sub>二</sub>烟霞物外心<sub>一</sub>

（『田氏家集』卷上）

遊二山寺一

三宮

苔壁松軒一上方 被<sub>レ</sub>催<sub>二</sub>詩客<sub>一</sub>暫彷徨

観音堂裏秋雲紫 極樂橋前夕日黄

寒沼風揺拍<sub>レ</sub>浪 禪庭年旧竹穿<sub>レ</sub>墻

対来僧侶閑談所 縦滅<sub>二</sub>罪霜<sub>一</sub>添<sub>二</sub>首霜<sub>一</sub>

（『本朝無題詩』卷第十 山寺下）

絶句と律詩の違いはあるものの、両編とも山寺にて僧侶の話聞くことを通して、自らの境地を述べている詩である。しかし、その詠み方は微妙に異なる。九世紀の無題全盛時代の忠臣の詩は、山寺の本意である世俗を離れた心を僧侶の話から得ると詠んでいるのに対し、輔仁親王の詩は秋の山寺の光景を中心に詩が展開され、老いの嘆きに帰着させている。僧侶も詠み込まれているが、それは老いを感じさせる山寺の景物の一つとして詠まれているにすぎない。

このように、同題でも、九世紀の無題詩が主題から想起することだけを詠むのに対し、十一世紀の無題詩は、そこにならず周囲の景物を絡めて詠む、という手法をとっていることがほ

とんどである。十一世紀の無題詩が、あくまで新しい詩境を発掘するための一手段であることが、ここに見てとれる。

このように「無題詩」といっても、九世紀のそれと十一世紀に再興したものとは全く異質のものであるといえるのである。

平安期の詩題について、以上の考察までをまとめれば、まず、九世紀には無題詩が多く詠まれていたが、次第に句題が台頭し、十世紀以降は句題詩が中心となる。そして、十一世紀になると句題詩に飽き足らない人々で無題詩詠作の動きが始まるが、それは九世紀までの無題詩とは異なり、あくまで詩作の新境地を求めている宮廷外での動きであって、したがって公的な詩会で用いられることは少なかった、ということになるうか。

そして、重陽詩宴の題の推移も、これらの現象の流れの中にあるものと考えてよいものといえよう。

## 二 不定字数句題から五字句題へ

句題について、さらに「重陽詩宴の題一覧」を見ると、句題の中でも、宇多・醍醐両朝頃から五字題が多くなり、一条朝以降は完全に五字句題だけが出題対象となることに気づく。逆に言えば、宇多・醍醐朝以前には句題といえども五字題でないものも多く出題されていた、ということになるのであるが、本項ではこの、句題が不定字数から五字へと変化していく現象について考えてみたい。

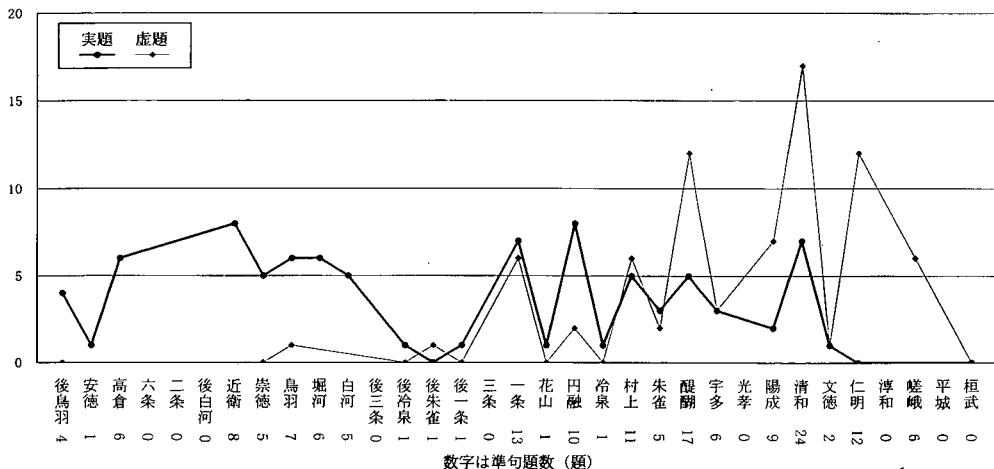
そもそも、『作文大畧』「出題事」項における句題の定義は

「句題者五言七言詩中取下叶二時宜一句」というものであるが、本朝における句題が五字題を主に指すということは「類聚句題抄」がほぼ五字題ばかりを所収していることから明らかである。しかし、句題<sup>註9</sup>五字、という概念ができてきたのはいつ頃のことであろうか。

まず、繰り返しになるが、『重陽詩宴の題一覧』によれば、宇多・醍醐天皇代頃から五字句題が顕著になってくる。これは前項で述べた無題詩と句題詩の逆転の時期と重なっているのであるが、おそらく偶然ではないであらう。

というのも、重陽詩宴での題のほぼ半数が宇多・醍醐両朝において出題されたものであり、また重陽詩宴に限らずとも、醍醐朝は、天皇のみならず宇多法皇も競って多くの詩会を催した、漢詩文の興隆期である。五字題による句題詩が多く作られることで、後世、句題<sup>註8</sup>五字、という概念が定着していったと考えるのは決して不自然ではないと思われる。

次に、『グラフ3 準句題内訳』を参照願いたい。これは、五字以外の句題を、実題と虚題<sup>註8</sup>の別に示したものであるが（五字以外の句題は、そもそも漢詩の一句と同じ形であるという句題の定義に反しており、また、句題のおよそ9割弱が五字題であるという点から、本稿では、以下、五字以外の句題を、句題に準じる、という意味で「準句題」と称して論を進める）、これによれば、句題詩が増加する宇多・醍醐両朝以降も準句題が目立って増えることはないことが知られる。つまり、句題詩の



【グラフ3 準句題内訳】

増加が五字句題の増加によるものであることを示している。

さらに、冷泉朝以降の準句題は、ほぼ実題中心である。<sup>注10</sup>すなわち、雅的な詩会における準句題の出題が減少しているというところであり、雅的な詩会は五字句題で、という設題意識が定着してきたことを示すものと思われる。

振り返って、重陽節会における詩宴の題であるが、この詩会は実題を出題すべき場ではない。また、五字句題の定着してきた時期には、「はじめに」で述べたように重陽節会が行われていなかった。そのため、「重陽詩宴の題一覽」でみると重陽節会が復活した一条朝以降、五字句題が完全に定着しているようにみえるのである。

このように、句題の字数に着目してみると、重陽詩宴の設題状況は、十世紀初めと十一世紀初めに大きな転機があることがわかる。そして、そのいずれもが漢詩そのものの隆盛期であったことも決して偶然ではなく、漢詩の題詠の形式面の成熟が大量の詠作によって押し進められていたことを示唆するものと考えられるのである。

### 三 詠物題から題詠題へ

これまでは重陽詩宴の題の形式についてみてきたが、本項ではその題がどのような内容をもつものであったのか、という点について考えてみたい。

「はじめに」で述べたように、重陽詩宴において出題された題を一瞥すると、はじめは重陽節とは関係のない秋題が出題されていたが、次第に重陽節に因んだ題が多く出題されるようになることがわかる。(「重陽詩宴の題一覽」参照。表中の・印は重陽節に因んだ題。)

また、さらに詳しくみれば、重陽節に因んだ題でも、「重陽節菊花」「九

日落葉」「觀賜群臣菊花」など、九月九日という日付や会次第などの詩会の環境や状況を反映した無題から、「菊是為仙草」「菊是花聖賢」「時菊似嘉賓」といった「菊」に関する普遍的な内容を持つ句題へと変わっていく様子が窺える。

すなわち、重陽詩宴の題は、眼前の景物を詠む詠物的な題から、虚構の世界を詠む題詠的な題へと変化しているといえるのである。

そしてこの変化に、前項までみてきた題の形式的な面における変化を合わせてまとめてみると、平安期の重陽詩宴の題の最も発達した形は、重陽節に因んだ普遍的な内容の五字句題、というものになろう。こういった詩題の出題が顕著になるのは、醍醐天皇崩御によつて重陽節会が中止されていた後、すなわち一条朝以降であり（「重陽詩宴の題一覽」参照）、そして、その原因として考えられるのは、重陽節会の平座化に伴う重陽詩宴の独立である。

約三十年を経て復活した安和元（九六八）年の重陽節会が平座であり、その後、平座での開催が常例化したことは「はじめに」で述べた。倉林正次氏の調査によれば、平座での重陽節会は、「文学の宴としての要素」は全く見うけられず、「独自の特色をもたぬ賜酒の宴」であったという。

では、賦詩の場がないとなれば、これらの詩題はどこで出題されたものであったのか。それは、「平座後の賦詩の会」である。平座後の詩会是一条朝に始まり、後に受け継がれていくもの

であるが、「第二次の催し」であり、「臨時的、私的」な会でありながら、公的な場合と比しても「詩会としての体裁次第に変わりはない」ものであった。また、諸事情で平座さえ開催し得ない場合にも行われた事例があり（寛弘七（一〇一〇）年など）、「独立した文芸行事」であったようである。

これは、道長を中心とした文学的サロンの影響するところであることは間違いなく、倉林氏も、

九日の賦詩作文の試みが、九月節会の形から、平座の後の殿上作文として抜き出され、形成することによって、ある

意味では、道長中心の文学的サロンが一層色どりを増し、

結果の度を高める影響力をなしたともいえよう。

と前掲書で述べている。

こうした文芸性を重視した詩会において出題されるべき題は、当然、詠物題ではなく、題詠題であることは予測のつくものであろう。したがって、明らかに詠物題ではない題の出題が、一条朝以降定着する一因として、この重陽節の平座化による、詩会の独立が考えられるのである。

ところでこの時期に、詩会での作文がより文芸的なものを目指していたと思われる現象は、重陽詩会だけにみられるものではない。一条朝前後を契機として詩題の変化が散見できる。

まず、あげられるのが新題の増加である（新題とは、『作文大略』にもあるように、出典のない句題をさす）。句題の出典は圧倒的に『白氏文集』が多いのであるが、一条朝の頃からこ

れが減少し始め、出典にしばられない日本独自の句題が多くを占めるようになる。<sup>注13</sup>

また、新題の特徴は、【表 出典の有無による四季題の割合】に示したように、季節感を重視した題が多い、ということである。これは、季節感を重視する日本独自の文化や文芸に習った結果、すなわち詩題の和習ともいふべき現象であろう。

さらにこの時期に、「霞」「郭公」など、和歌の題材から取り入れたとみられる景物が詩題に見受けられるようになる。<sup>注14</sup>これも漢詩が和歌に影響を受けた一事例であり、漢詩の新しい可能性を探る試みであるといえよう。

このように、中国文学を直接反映していた句題が和習化する一方で、「一 無題から句題へ」で述べたように無題が再び流行

あるいは言い方を変えれば、醍醐朝までと、その後三十年間を経て復活した後とで、設題意識に違いがあるといつてよいであろう。

また、重陽詩宴の題から敷衍しうる平安期の詩題の変化について簡単にまとめれば、まず無題が圧倒的であった九世紀の題詠に始まり、十世紀に句題が流行、句題は大量に詠まれることによって定着し、まず形式的な面が、やがて詠物題から題詠題へ、あるいは和習といった質的な変化を経て、平安期の漢詩の題詠の主流となる。十一世紀になると、隆盛を極めた句題に對峙する形で無題が再び台頭するが、それは私的な詩会の世界のことであり、公の詩会では依然として句題中心であった、となろうか。

しかしその後、平安後期の重陽詩宴の題は、日記記録あるいは詩集等に次第に現れなくなってくる。これは何故であろう。

前項で紹介したように、倉林正次氏の注1書によれば、平安後期、平座化した重陽節会は、作文の場を持たないものになり、文芸要素のより強い独立した重陽詩宴が行われるようになっていった。節会から独立した重陽詩宴は、公的行事ではないため、節会での詩宴ほどには記事として残らないこととなる。

しかし、詩題未記載という現象が、単に重陽節会に関する一連の変化だけが背景なのではないようにも思われる。というのも、重陽詩宴に関してだけでなく、平安期の詩題全体を見て<sup>注15</sup>も、詩題の記述が次第に少なくなってくるからである。具体的

| 出典あり        |             | 出典なし        |             |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 四<br>季<br>あ | 四<br>季<br>な | 四<br>季<br>あ | 四<br>季<br>な |
| 215         | 175         | 658         | 154         |

(題)

【表 出典の有無による四季題の割合】

\* 四季題とは、題材として四季の景物が含まれている題。

し始める。こうした新しい詩境の模索が一条朝前後に集中していることを考えると、この時期に漢詩の題詠そのものが大きく変質した、といつても過言ではないのではなからうか。

おわりに

前項まででみたように、重陽詩宴での題は、醍醐朝に形式が、一条朝に質的な面が変化している。



には、十二世紀に入ってからが目立って少なくなってくるのであるが、このことは何を意味しているのであろうか。

少なくなった理由として考えられるのは、詩会そのものの減少、詩会が催されても何らかの事情で記述されていない場合、の二通りである。前者の理由であるならば、これは明らかに、平安後期には漢詩（あるいは詩会）が社会的に機能しなくなってきた、ということを示す一端と考えられる。

しかし、後者の理由で減少していたにしても、同じ条件で開催されながら記録されない、ということ自体が、平安前期に比べて漢詩（あるいは詩会）が社会的に機能していなかった、ということが言えそうである。

そして十二世紀といえば、和歌の世界に目を転じれば、ここでは院政期という和歌題詠が文芸的にも確立し、中世和歌へ向かう充実した時期を迎えている。このことは、詩題未記載という現象と無関係ではないようにも思われる。

実際、記録類に残る平安期の詩題は、院政期以降（特に近衛朝以降）、実題がほとんどとなる。<sup>注15</sup>これは換言すれば、虚題を出題するべき雅的な詩会での題が記されていない、ということであり、ひいては、平安も後期になると詩宴の役割が、雅なものではなく学究的な場として重要視されていた、ということでもあろう。そして、そこで漢詩に変わって公的な雅的な場で詠まれるようになったのが、和歌題詠歌なのではないか、という想像も、真実に遠いものではないように思えるのである。

以上、重陽詩宴の題を通して垣間見られる平安期の詩題の変化について見てきたわけだが、本稿では紙幅の関係で、和歌題詠との関わりについては詳しく言及できなかった。しかし、平安期の和歌題詠の背後にはこのように漢詩の題詠の影が常に存在することは間違あるまい。このことを最後に再び示して、今後の研究課題とし、別稿にて改めて報告する機会があれば、と思っている次第である。

## 注

1 本稿で考察対象とする「重陽詩宴の題」とは、公私に関わらず九月九日に催された詩宴で出題された題とする。

重陽節、節会に関しては、山中裕・今井源衛編『年中行事の文芸学』（弘文堂昭和56）所収「三・四季の行事と古典文学 8 重陽」（後藤昭雄執筆、倉林正次『饗宴の研究（文学編）』（桜楓社・昭和44）所収「九月九日節」など参照。

2 「魏文帝與鍾繇書曰、歲往月來、忽復九月九日。九為陽數、而日月並應。俗嘉其名。以為宜於長久。故以享宴高會。」（『芸文類聚』歲時部）

3 「九月九日。四民並籍<sup>レ</sup>野飲宴。按<sup>二</sup>杜公瞻<sup>一</sup>云。未<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>起<sup>二</sup>於何代<sup>一</sup>。然漢世以來未<sup>レ</sup>改。」（『荊楚歲時記』）

「朝廷飲宴。士孫瑞理王充等事云。興平二年秋、朝廷以<sup>二</sup>九月九日<sup>一</sup>見公卿近臣飲宴。」（『北堂書鈔』）

「西宮雜記曰。漢武帝宮人賈佩蘭、九月九日佩<sup>二</sup>茱萸<sup>一</sup>、

食<sub>レ</sub>餌、飲<sub>レ</sub>菊花酒、云<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>人長寿<sub>一</sub>。」(『初学記』)

- 4 「九月甲辰朔壬子、天皇宴<sub>二</sub>于旧宮安殿之庭<sub>一</sub>。是日、皇太子以下至<sub>二</sub>于忍壁皇子、賜<sub>レ</sub>布各有<sub>レ</sub>差<sub>一</sub>。」(『日本書紀』)

- 5 「甲子。(略)幸<sub>二</sub>神泉苑<sub>一</sub>。宴<sub>二</sub>侍從已上<sub>一</sub>。奏<sub>レ</sub>妓。命<sub>二</sub>文人<sub>一</sub>賦<sub>レ</sub>詩。五位已上及文人賜<sub>レ</sub>祿有<sub>レ</sub>差。」(『日本後紀』弘仁三年九月)

- 6 注1掲の『年中行事の文芸学』所収「三四季の行事と古典文学 8 重陽」、倉林正次『饗宴の研究(文学編)』所収「九月九日節」

- 7 本稿における句題(広義)、無題の定義は次の通り。

句題：漢詩の一句と同じ形式の題。多くは五字だが、『作文大鉢』により、五字以外の題も指す。

\* 本項では、句題(広義)の下位概念として「準句題」という語を私に設けているが、これについては後述。

- 8 無題：句題以外の題。『本朝無題詩』の題と同じ形の題。

実題、虚題の定義については『作文大鉢』「按題」項の「題有<sub>二</sub>虚実<sub>一</sub>。出<sub>二</sub>於経籍奥理<sub>一</sub>者。謂<sub>二</sub>之实題<sub>一</sub>。懸<sub>二</sub>於風月浮花<sub>一</sub>者。謂<sub>二</sub>之虚題<sub>一</sub>。」という記述に従う。実題はその出典の關係から四字題であることが多く、講書竟宴作文等の学究的な場での出題が目立つ。また、稿者の調査によれば、句題の9割が虚題である。

稿者の調査による。

- 9 一条朝での虚題の比率が高いが、一条朝は詩会の開催数

も極めて多いので(句題二〇〇題中、虚題は一九三題。

その中の六題が準句題。)問題にすべき数ではないと判断した。また、実題を出題するべき詩会は開催数も限られることも、比率を高くしている要因であらう。

- 11 『饗宴の研究(文学編)』『文学の基盤・九月九日節・四、平座・2 構成次第』『同・3 平座と詩会』。以下、本文中の「」内の語も断りがなければ同著より引用。

- 12 『饗宴の研究(文学編)』『文学の基盤・九月九日節・四、平座・3 平座と詩会』

- 13 稿者の調査による。また、金子彦二郎『平安朝文学と白氏文集』(藝林舎・昭和30)の調査でも、同様の結果となっている。

- 14 稿者研究発表「平安期の詩題」(平成十年度学習院大学国語国文学会春季大会 於・学習院大学 平成10・6・20)

稿者の調査による。「平安期の詩題」(平成十年度学習院大学国語国文学会春季大会 於・学習院大学 平成10・6・20)として発表。

【重陽詩宴の題一覧】

| 詩題        | 開催年月日         | 主催者   | 詩題                                   | 開催年月日         | 主催者       |
|-----------|---------------|-------|--------------------------------------|---------------|-----------|
| 句・菊花      | 809～813.9.9   | 嵯峨天皇  | 句・秋日懸清光                              | 895.9.9(寛平7)  | 宇多天皇      |
| ・秋露       | 809～813.9.9   | 嵯峨天皇  | 句・菊花催晚醉                              | 896.9.9(寛平8)  | 宇多天皇      |
| ・秋蓮       | 809～813.9.9   | 嵯峨天皇  | ・観群臣採茱萸                              | 897.9.9(寛平9)  | 醍醐天皇      |
| ・秋柳       | 809～813.9.9   | 嵯峨天皇  | 句・菊有五美                               | 898.9.9(昌泰1)  |           |
| ・秋山       | 809～813.9.9   | 嵯峨天皇  | 句・菊散一叢金                              | 899.9.9(昌泰2)  |           |
| 句・三秋大有年   | 809～814.9.9   | 嵯峨天皇  | ・寒露凝                                 | 900.9.9(昌泰3)  | 醍醐天皇      |
| ・重陽節菊花    | 809～827.9.9   | 嵯峨天皇  | 句・(壽星南極見)                            | 901.9.9(延喜1)  |           |
| ・秋可哀      | 810～822.9.9   | 嵯峨天皇  | 句・寒菊載霜袖                              | 901～957.9.9   | 醍醐天皇？     |
| ・九日落葉     | 817～818.9.9   | 嵯峨天皇  | 句・(露葉辭条下)                            | 902.9.9(延喜2)  |           |
| ・山亭明月秋    | 823～827.9.9   | 淳和天皇  | ・(玉砌蘭)                               | 903.9.9(延喜3)  |           |
| ・秋虹       | 823～827.9.9   | 淳和天皇  | 句・(秋菊兼檉櫓)                            | 904.9.9(延喜4)  |           |
| ・九日翫菊花    | 826.9.9(天長3)  | 嵯峨上皇  | ・(茱萸玉佩)                              | 906.9.9(延喜6)  |           |
| ・(秋風)     | 833.9.9(天長10) | 仁明天皇  | ・(觀寒覓雲羽)                             | 907.9.9(延喜7)  |           |
| ・(秋風)     | 834.9.9(承和1)  |       | 句・霽色明遠空                              | 911.9.9(延喜11) |           |
| 句・(秋氣搖落)  | 835.9.9(承和2)  |       | 句・(爽籟驚幽律)                            | 912.9.9(延喜12) |           |
| ・(蟬蛸吟)    | 836.9.9(承和3)  |       | 句・(露重菊花鮮)                            | 914.9.9(延喜14) |           |
| 句・(露重菊花鮮) | 837.9.9(承和4)  |       | 句・菊有延年術                              | 914～981.9.9   | 天皇        |
| ・(菊潭引)    | 839.9.9(承和6)  |       | 句・寒雁謫秋天                              | 916.9.9(延喜16) | 醍醐天皇      |
| 句・(燭化為塵)  | 841.9.9(承和8)  |       | 句・(秋露如珠)                             | 917.9.9(延喜17) |           |
| 句・白露為霜    | 843.9.9(承和10) |       | 句・草木凝秋色                              | 918.9.9(延喜18) |           |
| 句・黃菊殘花欲待誰 | 843～892.9.9   | 天皇    | 句・秋菊有佳色                              | 921.9.9(延喜21) |           |
| 句・(問秋光)   | 844.9.9(承和11) |       | 句・(折花香盈把)                            | 926.9.9(延長4)  |           |
| ・(九日洗蘭)   | 845.9.9(承和12) |       | 句・(秋日無私照)                            | 927.9.9(延長5)  |           |
| ・(九日侍宴)   | 846.9.9(承和13) | 仁明天皇  | この間、9月が醍醐天皇の忌月にあたるため、重陽宴は開催されていなかった。 |               |           |
| ・(草木言)    | 847.9.9(承和14) |       | 句・露重花低                               | 967～1012.9.9  |           |
| ・(雨洗白菊)   | 848.9.9(嘉祥1)  |       | 句・菊是為仙草                              | 977.9.9(長徳3)  | 一条天皇      |
| ・(託附)     | 849.9.9(嘉祥2)  |       | 句・(草樹減秋声)                            | 999.9.9(長保1)  | 一条天皇      |
| 句・山人採藥    | 854.9.9頃      | 文徳天皇  | 句・(菊為九日花)                            | 1004.9.9(寛弘1) | 一条天皇      |
| ・(重陽菊酒)   | 859.9.9(貞観1)  |       | 句・菊是花聖賢                              | 1005.9.9(寛弘2) | 一条天皇      |
| 句・菊暖花未開   | 861.9.9(貞観3)  | 清和天皇  | 句・菊花映宮殿                              | 1007.9.9(寛弘4) | 一条天皇      |
| 句・鴻雁來賓    | 862.9.9(貞観4)  | 清和天皇  | 句・(菊是花中主)                            | 1010.9.9(寛弘7) | 一条天皇      |
| 句・景美秋稼    | 864.9.9(貞観6)  | 清和天皇  | 句・(菊嫩臨露輕)                            | 1019.9.9(寛仁3) | 後一条天皇     |
| ・山人獻茱萸杖   | 867.9.9(貞観9)  |       | 句・(菊花似壽星)                            | 1033.9.9(長元6) |           |
| ・喜晴       | 868.9.9(貞観10) | 清和天皇  | 句・盃酒泛花菊                              | 1034.9.9(長元7) | 勸学院       |
| 句・天錫歸老    | 870.9.9(貞観12) | 清和天皇  | 句・時菊似嘉賓                              | 1035.9.9(長元8) | 後朱雀天皇(東宮) |
| ・九月九日侍宴   | 882.9.9(元慶6)  | 陽成天皇  | 句・(菊開水岸香)                            | 1051.9.9(永承6) | 後冷泉天皇     |
| ・觀賜群臣菊花   | 883.9.9(元慶7)  | 陽成天皇？ | 句・(菊為花貴種)                            | 1076.9.9(承保3) | 白河天皇      |
| ・玉燭歌      | 884.9.9(元慶8)  |       | 句・(詩酒被催菊)                            | 1079.9.9(承暦3) | 白河天皇      |
| 句・鐘声應露鳴   | 889.9.9(寛平1)  | 宇多天皇  | ・(簾菊)                                | 1137.9.9(保延3) | 鳥羽天皇      |
| ・觀群臣佩茱萸   | 893.9.9(寛平5)  | 宇多天皇  | 句・(菊開聖徳中)                            | 1172.9.9(承安2) | 高倉天皇      |
| 句・天澄識寶鴻   | 894.9.9(寛平6)  |       |                                      |               |           |

\*「句」は句題。

\*「・」は重陽節にちなんだ題。

\* ( )は詩が確認できない題。